

# 「自由の学び舎」を守るために

吉村 和真

学校法人京都精華大学理事長

私が理事長に就任したのは、2024年末のこと。その際、各方面に送付する挨拶状に少し趣向を凝らしてみた。新役員の氏名に続いて、1枚の絵(図・実物はカラー)を付したのだ。だが、これがいったい何を意味するのか、説明も紙幅も不足していた。そこで、この場を借りて、挨拶状の意図と本法人が目指すところを絡めてお伝えしたい。

この絵は漫画家のこうの史代さんによる描き下ろしの水彩画である。『夕風の街桜の国』の主人公・平野皆実や『この世界の片隅に』の北條すずをはじめ、『長い道』『さんさん録』『日の鳥』と、複数作品の登場人物たちが京都精華大学のキャンパスで学生生活を謳歌している様子が描かれている。マンガ学部の教員でもある私が個人的に執筆依頼したものだ。2021年の制作だが、この絵に込められた2つのメッセージが新理事長からの意思表示として申し分ないと考え、三つ折りの挨拶状の一頁に配置させてもらった。

2つのメッセージとは何か。1つは、戦時下を含め、作中でいろんな時代を過ごした登場人物たちが、かりに現代日本に生きていて、自分の好きなことを自由に学んでいるとしたなら、どんなに素敵なことだろうとの想い。もう1つは、大学という専門も出身も異なる人々が集まる場所で、自分の考えや方法だけにとらわれず、多様な友人や他者との出会いを通じ、切磋琢磨できる環境の尊さである。

どこに誰がいて何をしているのか眺めるだけでも楽しい、この絵の中ほどには、本学の建学理念である「自由自治」の4文字を刻んだ石碑も見える。作中では原爆症で新調のワンピースを着ることなく絶命した皆実が編み物をしたり、絵を描くことが大好きなのに不発弾で右手を失ったはずのすずが写生していたりと、学生に扮した登場人物たちが思い思いに過ごしている。つまり「あの戦争がなかったら」という想像力が、この絵の奥行きを支えているのだ。

それだけに、誰もが安心して自由に学び合え

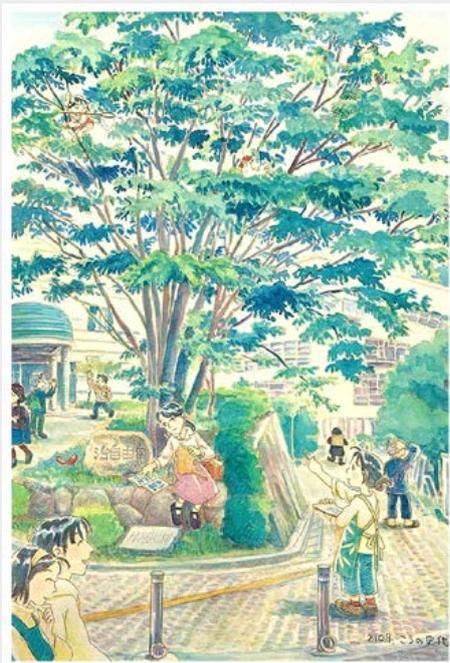
る居場所がいかにかけがえないものか、微笑ましくも切ないほど伝わってくる。「自由の学び舎」というタイトルには、そのような本学の理念や大学の本来的存在意義が含意されている。このさんの作品を未読の方でも共感していただけの部分があると思うが、ご存知の方ならばなおのことだろう。

翻って現在、国際的に戦禍が広がり緊張感も高まる中、学問の自由どころか生命の危機にすら瀕している若者や子どもたちが増えている。アメリカにおける大学へのあからさまな政治介入も他人事ではない。一方、国内では、未曾有の少子化を見据えた教育業界の再編が進む中、扇動的な外国人政策に耳目が集まるなど、国内外の学生たちの将来が左右されかねない局面を迎えている。

そうした状況下、本学ではマンガ学部を中心に指折りの留学生比率を示している。その支援体制の構築や国内学生との協同には課題も山積みだが、多様な国籍の学生との対話や文化交流

を通じ、政治や経済上の緊張を緩和する糸口を見出すことがある。それは、本学のもう一つの建学理念「人間尊重」の大切さを再認識できる瞬間でもある。

すなわち、自由や人間が脅かされる時にこそ、京都精華大学の存在意義はいっそう高まるわけであり、今後の活路も開かれるということだ。それを念頭に、これからも国内外の学生たちにとっての「自由の学び舎」であり続けられるよう、中長期的な視野と臨機応変な手腕を備えた大学運営に励む所存である。



[図]この史代「自由の学び舎」